

シテツ

2号

私達の行動に對して、登山の経験のない人は、又は
経験のあつても、疲労の外に何物とも味、得ない、
人は、馬鹿々々しいと嘲笑う。嘲笑うは人の筋
手である。私自身も、登山を別に貢へ、こと、賞ので
貢へ度くな。これら事とは思つて居らん、が心
よ、ここと信じて、

一 岩村伊助「スイス日記」

溪 稜

第2号

目

次

丹沢集中登山(2~10)

- 木無本谷 ----- 近藤滄江
クセドの沢 ----- 村田俊満
源次郎沢 ----- 大武昭雄
勘七の沢 ----- 山縣昌彦

西丹沢合宿(13~22)

- ユーシン入り ----- 吉田泰彦
同角沢 ----- 管野達也
サンザ洞 ----- 田中莞二
モチコシ沢 ----- 辻勝四郎

西丹沢生活あれこれ ----- K.T.(23)

苗場山スキーツアー ----- 简井滿栄(32)

仲間を語る(1)

- 吉田泰彦雑感 ----- 辻勝四郎(26)
吉田泰彦論 ----- 山縣昌彦(30)
音楽慢歩(2) ----- 吉田泰彦(25)
川柳 ----- 溪稜同人(11)

- 知つておきたい登山用語(1) ----- (12)
食務報告 ----- (10)
浦和市会連役員 ----- (31)
締集後記 ----- (35)

春に際して

桜の花も散り新緑の候となり
ました。皆んな山の話してもち
きりです。丹沢集中登山で益々
あけた我々の渓谷も今年は
大きく跳躍する年です。
一緒に元気で尾根を、沢を
歩きましょう。胸一杯に
新鮮な空気をすい込んで
歌おう、青春賛歌を！。





(大倉尾根から表尾根を望む)

第一回 集中登山 (結成記念)

1957.3.24

丹沢 { 四八瀬・甚ヶ沢、
水無川・本谷
・源次郎沢
・セド沢左股

初 沢 歩

— 水無川本谷 —

近 藤 澄 江

三月の声を聞くと山がたまらなく忙ー。
戸棚の中には舞込まれた山の相手を取出し
て春風の匂いをかぎせると、言つても、すみ一種
の虫干しのようなものであるが、そうして二日を
想ひ返しながら今年の山旅をあれこれと元氣の
事が私の春先の一つの樂みなのだ。

この後に私の山旅が始まるのである。そうした
意味で溪穀山岳会結成記念を含めての集中
登山は私にとっては三月余りの眼の計りから一
年半ほど掛かる事と云う今年の新し出発の一つ
である。

才一回集中登山は去る三月二十四日、溪穀十
名、役員十名、計二十二名の参加のもとに
行われた。
指揮要員不備乍ら一人の事故者もなく全員
無事ト塔、岳を踏む事が出来たのは幸でした。
今後も此の種登山を年二回は持ちたいと思ふ。

輝く水無川の流れに沿つて林道を一寸歩く。歌でも歌う
くすろ桜を。気分を意味もなく抑えて各自然と進んでいく。やがて源次郎は急いで今に到着する。
比如は水無川通行の墓場などだらう。大部今の人達が林道を改めて登攀する準備をしてる。草鞋に履きかえる者あり、腹ごしらえするものあり等。——我々のパーティも此處で三つのパーティに分れるのに思案した結果出発前の計画とは一寸林道を変えて女子を二年に下ける事とした。何しろ次と名の付くところは今回が初めてであり、次に関する知識はわからず、革鞋のみの前後も知りな私は説明されず、本谷のパーティに加わることなく快諾した。——即ちこれが「盲蛇」おおずと云ふもとのことは後で感じたのであるべ——しかし、こんな事よりも実は未知の憧やが私の心を大きく支配していたかも知れない。

こうして源次郎に入るパーティと別れて直進する歩みを進める。流れを右に左にと車いながらしばらくいくと下へが秋の前に二二りふこがつてゐる。自此で初めて革鞋に替り換える。足が宙に浮く。いた様に軽く何か安定感を失った林を錯覚する事にした。さすがにした。そもそも此のザイルと言つものが私は初めてである。一端に体をしつゝして結び四本の指を置くのも採り林を岩角にホールドするため一步くべき実に登り十メートル下りも思ふ外容努力に全く切る事が出来た。此處でスセドの次に入りパーティを右に見送り、遂に上りゲート以下四人の統計五名の本谷通行パーティとなつた。直ちに迎えき下りは右側を金ノ又も下ろが私を阻む。息をつく暇もない。ザイルの助けを借りて、れども無事に滝の右手を登る。ものはやゝまで未ると尾根歩きに見られる林を一步前進する毎にその視界が広りて明るくなつていくのは全く逆に歩ければ歩く程この滝谷は少第深く深さを増してそこには無限の深を抱擁してゐるような感じがする。下下下下、下下下と逆行を繰り、左右に冲源次郎、木の又大口次を垦進り、首を直ぐま続けていく。このあたりまで未ると樂しくなくといふものは私の心中には針の先程も直在しな

く立った。唯恐怖感が私を襲ひ、我々は周
りにお、かぶさつて、木の間からかすみに見
える上空が薄黒い雲であ、われる時は何か不
気味を感じました。この時程私は「おふくろ」
の事を真剣に考えた事はなかった。そんな氣
持で残す幾つかの滙を無中で登っていくと大滙
下りで我きにおそ掛かる林にそぞり立つ。これ
が最後の滙である事をリーダーから聞いた時は
少々ほっとした。左側を越えて大滙上部に到達
した時は今迄の恐怖感が、これでどうやら無事
に晴れそうだと、うやうやしく安心感に乗つて行くのがハツキ
リと入りた。

今迄の私をおつて、いた渓谷の暗が次第にひらけ
日射の塔ヶ岳もみと幾らもな、ようと思われる。

頂上に到達出来ると、云う事が新たな勇氣とな
つて落石の多い最後のカレをペーティに連れま
と努力しながら登つてく。そしてようやく稜線
へと出て塔ヶ岳の頂上に辿り着いた。今迄の苦
しみが大きを喜びに代つた。

それは今迄経験した事もない大きな苦しみであ
り又大きを喜びであった。時計は三時三十
分を指して、いた。

その後三十分五十分の休憩の後、再び六合尾
根に立つた。夕陽に照る金色に輝く彼方の山
々を望み乍ら一々立派な仕事を成し遂げたと
言う感じが過去二回の下りとは比較になら
ず、往々大きを満足感を与えて呉れた。

セドの沢左股

村田義満

水無川本谷班とも別れを告げ、食、セドの
沢に入る。ペーティは現役山岳部三人、ソラ桂
から二名の計五名で、サックは二人に一つと、う身
軽るないで、うちである。両壁がココロ状となつて
いる入口を入れると直ぐ左股と右股に別れる。

幾分右股の沢が狭くなつてはいるが、此の内中に
三十メートル、大滙があるのかと思うと足が止むを
思ふがする。兎も角、我々は左股、左股に入り、
昨夜未から懸念されて、た、雨も上がり快適を沢
歩きとなつた。沢床を行く。

らカレ沢が注ぎ、直ぐ四米と十米の二段の滝が行手を拒む。

四米は難なく右壁を登つたが、次の七米は右壁からルートがなく棚を左にトラバースして壁から右へ右へとトラバースしながらやつと落口に立つ。

次いで五米程の小滝を乗り越すと左からガレ沢が入る。両壁がこの辺から狭はまり中央の本沢両壁は風化されてゐる爲非常に脆く登攀中に落石の危険がある。

二、三の小滝を越して尚も上ると両岸から小沢が合し、三つ俣となる。三俣の入口から中央の本沢を見ると落差五米と十米の二段の滝となる。五米の滝は大きなチヨックストンを抱えており両側ともどちらからも登れるが、ハザレも左壁はオーバーハング氣味で重々サックなどでは登れない。そもそも全員軽く、よじ攀り、晝食を取り。観役の連中は登るのは不得手だが食う方は「マカシトケ」とばかり堅々ハンド食付く。塔ヶ岳で合流するため早々に腰を上下先を急ぐ。

幾つかの小滝を越して大きく左に曲る、二段の滝が掛り、下段にチヨック、スタンバある。二、一段

共左壁を登り桑に落口に立つ。
そこからは暫く小滝の連続で両岸には雪の大余多くなつて来た。前方が又三俣となり右から注ぐカレ沢と本沢との間に石垣が築かれてある。左沢は十米程の棚が掛つてゐる。

中央が本沢で尚も進のば三俣となり急に水が少くなる。山がて一寸右曲すると前方に急をかしが見え始めた。そのかしき眞中に左と右の二股に入り、今れ目から水が吹き出て、それが

直ぐ谷底へと消えていく。左沢に入ると急に雪が多くなつて来て、膝小僧まで潜る所になつて来た。谷中が狭くなつて愈々沢も終りを告げて来た。

時計を夏と二時だ。登り始めてから約二時間初め者が多いたので大分時間が掛つた。もうこの辺で草付きに取り付いてもよいたろうと手頃な斜面を金イ出す。こう沢底に雪が多くては時

河が掛つて一向に進まぬからだ。上へくへ
と行くに従つて、ヤブと勧木の密生してゐる地
帯に入つた。

およそ三十分、丹沢特有のもの、唐バヤブ潛ぎ
をさせられ表尾根縦走路に二時四十分飛び
出す事が出来た。此夕からは塔ヶ岳まで一息
で登り全員無事合流した。

源次郎沢ルート

大武昭雄

るという事になりホツと一息。更に十日
の「大したことないよ。あかしな枝沢に坐合つたら
とにかく右へくと入つていけば大丈夫」と
いう言葉に安心させられた。

以下ルートの報告にはならな」と思ひますが、と
にく書じてみます。

X

X

X

X

かに初め者向のコースとは見え、リーチーな
といふ役は樂ではない。ルートを見つけて登
り事にセーリングハイで一つの滝の様子を
はてんで頭に残つて、な。

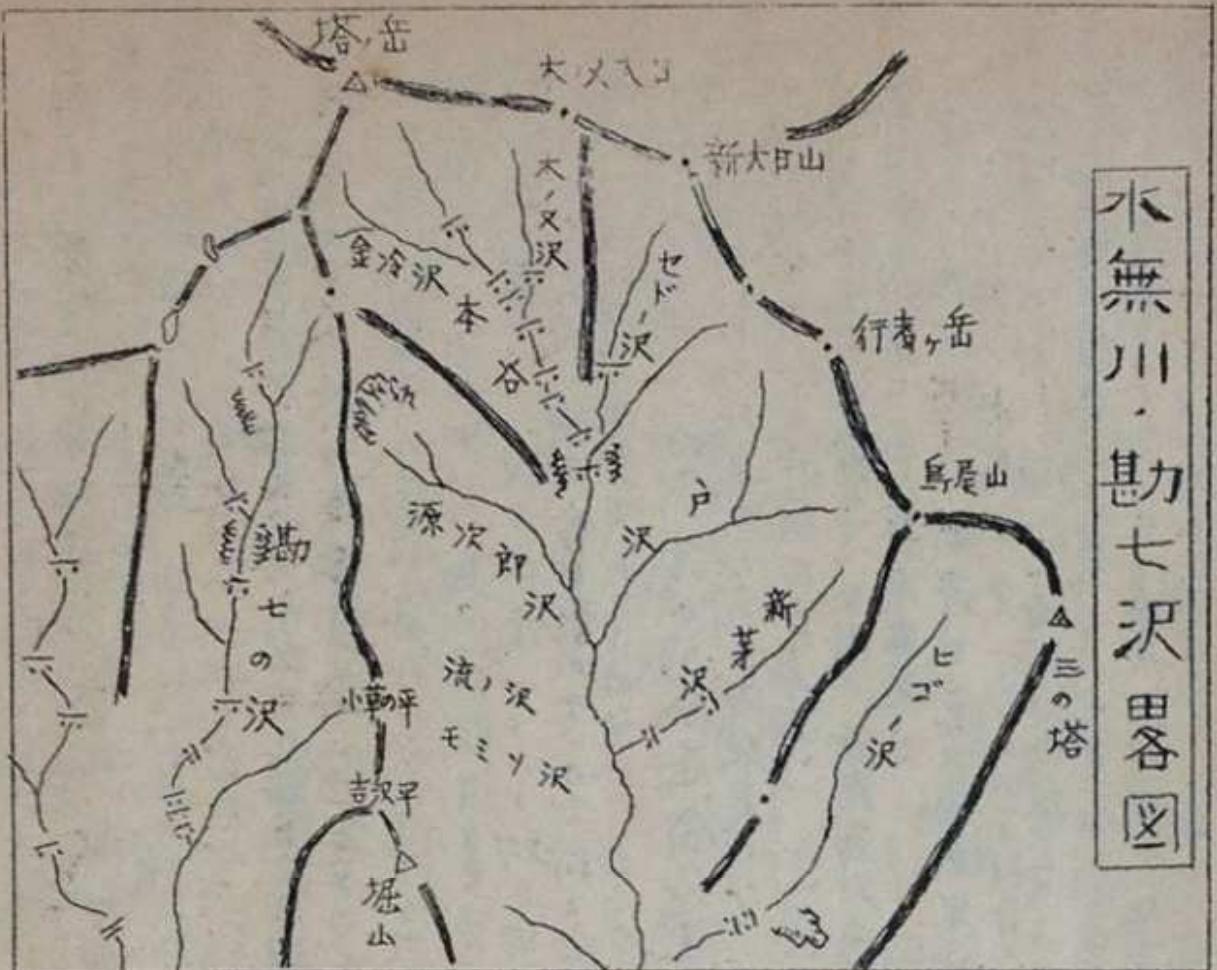
神和を出てから丹沢寮下の河原に着くまでは、
ロ田リードーにつづきセドの大股に入るつもりで
人びりとかまえていたのに、——、うんな
命令で漸次即に入らざるを得なくなってしまった

。 沢と名の付く奴は一九五四年谷川の西
黒へ入つたのと、一九五六年の夏丹沢の新茅
に入ったのと唯の二回しかなじんだから、八十公
心細、次第だ。それでも源次郎の出合で
最終的にメンバーの決定をした時、現役の女
子部部員三名と顧問の白石先生と
日山に入つて、ると、藤崎氏が加わって、
るという事になりホツと一息。更に十日
の「大したことないよ。あかしな枝沢に坐合つたら
とにかく右へくと入つていけば大丈夫」と
いう言葉に安心させられた。

以下ルートの報告にはならな」と思ひますが、と
にく書じてみます。

一〇、四〇、出合で本谷の辻バーティ、セドの村田
バーティと別れて、ゴロくした石の上を進む。水
は殆んどない。沢に入つて、るんだと、う氣が
あまりしてこない。ラジを腰にして、十センチやで
ツクを履いたまゝしばらく進む。やがて幾分
両岸がせまって足の先も水がかかる様になつた

水無川・勘七沢畠畠



ので、マラジに履き替える。
トツアは俺、しんがイは猿
と現役の三人に入る。

出合を立つた時は、陽も下していたので、音は快
調と、思つたが、いつの間にかぐくく霧がまよつて
来る。しかしそれも進行をはばむ程のものではな
く小さな棚の運敍を足元にフキのトウなども、
夏付けながら樂に游行する。ちよつと大きくな
つてルートに不安を感じると、うろろを向いて、
「オーケー どっちがいいんだー」と藤崎代に聞く
始末。まことに賴りなく一ダーピード。そ
れでも何とか八米の棚も無事に直登して七米
二メートルを終ける。

ふう返つて見るとはるか下方に宇治出合のバ
ンガローがマッチ箱よりも小さく見える。
時計の針が十二時の近いことを教えてくれたが、
外のルートの連中に負けるのもいやだと云う
ので更に前進を続ケ、小棚を一つ越してもう一
水がな。あわて、後進して小棚の下で昼食に
する。時まさに十二時ヒツタケ。

みんな思ひ思ひに食事を始める。篠崎氏はフランスパンにマヨネーズと玉子ケシンゴの特製ペーストの調理をほしめる。僕はあわてて、ナイフで中指を切る。手拭き途中で落して床たので木ラタキをする事が出来ないのでコム輪を巻き付けた。そしたら御貴の高橋さんが横文字の紙に、あまたアクリール付のバンソウコウを出してくれる。これは大いに助かった。(うまくやつてくれ)。これは大いに助かった。(うまくやつてくれ)。

（日籍著者）僕も今度こうこう物を用意しようと決つたが、横文字が読めないので何と云う

算

食事之後、ミカンのカン詰やら今迄食べた事も千ヨコシートのお菓子などを御馳走になつた。これは此のルートの特权だつたらしく、ハハ氣に方をうさバク付けてる間に予定の時刻をオーバーして、十二時半出発。

勘力七一汎

山縣昌彦

（メンバー）山縣・市川・管野

（役員）現役三名

（小棚を越すと両岸が急に開け、足場はどうしても悪くなつて来る。一步一步氣を付けながら下りて、河に、つの間にハ沢をうめ終る。しかし又場は相変わらず悪く、小さな石がさうくからく落ちて、そんな処を更に進むと赤土のようなどころへ出、ハタテの東南部へたぐりつく。（十三、四。分）

そこから大分尾根へと道には木た雪が大分残つて、西側から頂上までマラソンで行つちやえという。これが通用しないとなつた。

残雪を踏みきのをから頂上へたどり付いたのは、十四時十分。一四六一米十点三米（毫）以上には勘へをつめた山縣バードイギーすじに走らして、管野氏と周々脇午二時かした。

前夜現役部員と共に大倉の木無川河原のテントで一夜を明した我々は、木無川に入り人道と入れて朝八時四十八瀬へと向う。大倉から島の中の近道を辿って向もなく四十八瀬川へと、一時半まで二段に着く。朝早く所鳥か

F1を前にして革鞋に履き替え、右岸を直登。水量はまだ余り多くない。F2は左側をト

ラバース、現役には上からホイルを垂らし振子式にトラバースさせる。難なくF3を過ぎ下4の二

段は右へ廻り込んで越す。現役の練もハ

ハがどうも物足りないと各自内が訓団難をルートを選んで登る。下4も右へ廻りこまず水量がやゝ少ないので落口へ直登をしかけたが、やはアビツシヨイ氷を浴びて止めにした。エーロと名づた沢筋に新うへ堰堤が二つ作られ、ある。文化の方がひし／＼と山へ入り込んでくる

姿を見る事は淋しい。

間もなく十二メートル下5、現役に指示しながら左を直登。時間が早過ぎるのでアツフサインの練習をさせる。よく期待したフルデュに入ったが水量が少なく予期した程の快適さは味を

をも。

エルジユをすぎた頃より残雪が現れ始めた。間もなく堆石は殆んど雪に隠され、膝位までもぐる所もあるが、ツメでは気が疲れる落石の

心配もなく、麻革を踏んで一直線に金冷しひ頭へと飛び出す。

途中余り樂しくでしまつたので他の班に遅れをとつた心配しながら塔ヶ岳の頂上へ向う。

すっかり雪に埋もれた頂上に着いたのは予定の一時半を少し廻った時刻、他の班はまだであった。吹き飛ぶガスの切れ間から姿を覗せる丹沢主稜は、早くも我々の心を西丹沢へと誘うのであつた。

(タイム)

大倉木無川河原(八・〇) — 四十八瀬川三保(九・三)
— F1(九・五) — F2(一・〇・四) — 登食(一・四)
— 金冷(一・三) — 塔ヶ岳(一・四五)

△反省△

前日の天気予報が天候の悪化を示して、たゞハ、参加者が予定より大分へつたため、ハイマーの編成に支障をきたして、各イーダー

時に木谷、セドの沢のリーダの負擔を必要以上に重せめた。沢の初心者が多かった今回の林。登山には一パーティに少くとも一人のマニアリーダーの付く事が必要である事を痛感する。他の面では別にヒヤ上れる事も多かつたが、結成記念と銘うつただけに参加者の少ながつたのは残念だった。しかも参加者の大部分が殿の少ない勤人の諸君であつたのを見る時、休暇中の学生諸君は何をしているかと強く反省を促すものである。

集中登山の意義を認識して今後は此の種登山には万障を排すると言つた意気込みで宇先参加せられん事を希望する。



公務報告

辯宏視君

久保田畫譜

多年の宿望成つて、今度
水産大に入學しました。
「日本ハロセス」入社

〈新會員紹介〉

ものである。

集中登山の意義を、認識して今後は此の種
登山には一万个障害を排除すると言つた、意氣込み
で宇光参加せられん事を希望する。

卷之三

△ 新村ノアト房

一月末日付まで退会されま
した。

寄贈

ロツシェ著「ホイルのトツブヒ
ニ冊 山縣氏より 寄贈

「青春の氷河」の

柳川



山縣御老体へ

△ 今山頂で臆面もなく木一株出し

△ 木が林立す見ぞ眺めむし矣。我が行で大山

△ 灯火がかかるて見えまー身故

△ さりげなくば自覚し棲つて谷川へ

△ かれりぬば自覺し棲つて谷川へ

△ 老体す。轍打つ姿あわれなり

△ 深秋の如何は御老体の双肩

△ いがつてござる

△ 大武源次郎氏へ

箭井女次へ

△ 真恩けこれも好きじゃ

△ へ嫁の口をださうもう少し慎むべ

白石女次へ

△ 落石をボリュームを受く頼もしき

△ へ落石を頭で受けとめどうぞとは大したもの

△ です

△ 痛野立奴君へ

△ まくらもろか木樹の木もれ葉を而降

△ 加藤勇基へ

△ バ外集。男と全くにアイヌ地へ

△ 篠崎介二君へ

△ 次登りこんな快事と知らなんだ

知つておきな「登山用語」(1)

ゴルジー || 両岸の岩壁が狭まって、まるどろで、特に
氷蝕や水蝕で出来たもの。
ゴル || 仏語で峠の意。独語のヨンホ、英語のザッ
テルこれに同じ。

ジックヘリンググ || 確保。登攀者の一ヶ一の墜落に備
えてサイルを保持すること。ビレーイングに同じ。

スカイライン || 元来は水平線の意であるが、転じて
山稜などの空に接する限空線をいう。

スタンス || 支柱の意であるが、転じて岩登りの際
の支えとなる足場を言う。

千ヶ一 || 煙突を紙に切たよくな狭い岩の裂

け目。カミンに同じ。

チンネ || 一巨大な岩壁をもつ独立峰。

バットレス || 胸壁。谷に向つてかゝつた大きな岩の隆起

ビンチリ歩詣。又岩登りの際のテラスからテラ
スの間のホールドによって登る部分。

ビレーアンク・ピン || 岩登りの際、確保を確実にする
ためサイルをかける岩の穴起。

ブリクション || 岩登りの際、難場の登攀に岩に衣
服を密着せしめてその隙の抵抗で登る事。

リツシリ尾根。主として岩稜に用いる。

リンネ || 岩山の急峻を広く溝渠。ガリーに同じ。

ルンゼ || 山稜や山頂に喰入った岩溝。

ヴァリエーションルート || 主として沢筋や岩壁を

登って登頂する困難な登路。

アタッククリ攻撃。悪場への挑戦の場合に用いる。

アンザイレン || ザイルの一端を確保させて、岩壁を

下降する際の技。

クラックリ岩の裂け目で手を入れ得る程度のもの。

クリックフリ岩登りの際の手がかり。

カンテリ岩の凸角。又は岩壁の凸角を言う。

テラスリ岩壁上の広い棚。

クロワール || ゴルジューより急いで、ゴルジユより浅く、リ

ンネより深。

モルゲン・マート || 山が朝日に照ること。

アン・ホイレン || サイルで互の身を結び合ふ事。

ドームリ円山頂の事。

セルフビレイ || 自己確保。仲間を確保する必要

上ままで自分を確保する事。

乗越リ尾根上の峠の鞍などところで大体に於いて

両側の谷を結ぶように通行出来る。

岩小舎 || 痞状の岩又は中央・下部等のくぐれた

岩で治場として利用するもの。

さんざり急流をいう。サンザ洞の如し。

洞リ谷をいう。

つめリ沢の奥、どんづまりの意

宿合沢丹西

(4月10日～13日)

メンバー：田中、菅野、吉田、辻



(西丹沢玄倉川ユーシン附近)

つて下山した翌日から一雨が太陽は旗立ちて明るい陽
光の元に桜花咲き乱れるやうかな春の日が続いたのである。

才一日 ユーシン入り

吉田泰彦

始めて玄倉川に入った。生憎の悪天候で存分の活躍は出来なかつたが、それでも丹沢らしくらの山岳美分けても渓谷の美しさには魅せられた。リツーとザイルを背に東海道を下つたのも始めての出来事だ。同行の辻会長以下二名も同様のこと。

御殿場経の松田駅と小田急の新松田駅とを目と鼻の先。その新松田駅から落合行きのバスに乗り込んだ。約一時間で神錆だ。ユーシンへ行くには停留所

前の雜貨屋のすぐ横に入る。

此駄のラトラックの入る六道を約五十分で玄倉部落、こう辺でもう既に山の気分だ。ユーシンには吊橋を渡って対岸に出る。此をくら山神峠を至る道と今朝林道どに分かれるが、林道を進む。約三十分で小川谷の出合、玄河原に交錯する細い吊橋が見えて

前日迄の初夏の様な天候とは打って変わり、全日程を過ぎて晴向を全然見る、肌寒い合宿であった。特に才二日目をなぞは空気が僵硬の水を逆に吹き上げて天幕に葉がかかる仕事で、殆んど一時も出来ない有様であった。これも試練であるのだったのであるが、皮肉な事に天幕を背負

素晴らしい場所。マンアには絶好だろう。

二十分で女郎小屋沢出合、約一時間でモチコシ

沢り出合だが、林道からは全然見えない。モチコシ沢を採すにはカーブしてある二百米位のベランダ付きの

トンネルが目じる。このトンネルをすぐ手前

に河原に通づるがれがある。ここを降つて谷を遡

行約三十分でモチコシ沢出合。丹沢有数と言

われる六十糠の大棚がシズキを上へて落ちてゐる

この辺の河原は又素晴らしい。恐らく玄倉川遊

ひありう。一筋の林道を三十分程で同角沢、二段

の滝をかけて流れ込んでくる。約三十分程で林道の

最終点、ユーシンだ。吊橋の対岸、桧林の中に、

山小屋と飯場がある。

我々のテントはユーシンの午前約十五分の河原、丁

度滝沢から両山峠越みの道が合つている所だ。

雨にたゝられ開口したが、親切な木犀の家で

面倒を見られ、非常に助かった。山に来ると思わぬ

ところでヒュームにぶつかるものだ。愛称「俊

ちゃん」という中年夫婦の方には感謝の気持で

一杯だ。

個々の沢については、菅野、田中の各君が述べ

るはすだ。

才二日 同角沢

菅野達也

八時半テントを出る。しばらく林道を玄倉川に沿つて下る。オ七号墳道を越ければ、やがて右手に二段に落込む同角沢を見て林道から玄倉川へと降り立つ。革鞋のな、やは出合で革鞋を脱色したが差当らず結局地下足袋で登る事となつた。

出合の下ノを右側から逆に趣すと沢は傾斜を落して滑(ナメ)となつて続いている。二、三の小滝をへづつて越えれば、やがて滑状の三段、三十五米程の三重の滝に當つかる。

此處でマラジに履き替え、ザイルを解て、よ／＼ア

タックの開始だ。

生を下氏ザイルを付けると、下段の滝の右手に立ちハシグ氣味の壁を乘越し、打込人であるハーフンドカラビメを掛け、リッジ状のところをじく／＼と登つてザイルが三十糠程伸びたところでジップヘルする。

次いでYが登る。地下足袋を爲、足が滑るようだ。

岩ド馬乗りになりながらホールドされて慣らす

登つて、次いで小生の番。山石はぬるくとて滑る。下段の滝を越すと上部二、三米のところがホルトが少しく気持が良くな。滝の上部はスラブに入り下に右側を捲き氣味にトラバースして落口へと去る。

三室の滝を越すと直ぐに二十米程の水量の多、不動の滝が滝々として落込んでくる。勿論これも直登だ。左手のカリ一状のところに取付け斜めに走るバンドをトラバースして滝の三分の二程のテラスに出る。

此處から滝を横断して右手に移るのだ。打込人であるハーケンでジッヘルして先をトップ。丁氏が、



渡り、丁が続いて跳込んで、滝の中でスリップして落ちかけたが、そこはサイルの有難さ、クランと引張り上れる。次いで小生、左足を滝中の支卓に踏出して一気に渡る。四人ともスス濡れとなつて震えながら、小生の一一番濡れながつた様だ。丁氏とはズボンを脱いでしほる仕事である。

なをも崩れれば、右手から無名沢が二十米程の滝となつて落込むのを見送り、二、三の滝を越すと、又も右手から大杉沢が二十五米程の滝となつて落ちてくる。廊下状のところを小滝を越して下をも置きれば三米程の小滝にぶつかる。

これが如何に上午に登つても下半身を濡らされると、うに行水の滝らしいなるほど滝の上部はツルツルと手掛りなく水中にホルドを求めなければならぬ。しかし濡らされるのは面白くないと言つて、肩を借りて滝の右手を登つたが、不幸丁だけが濡らされたので予儀なく我々も行水の滝なる事を認めたのであった。

ここから上部は廊下も開けて暫く十数メートルの無名の滝にぶつかる。水量は比較的少ないが、赤茶けで又少くとしたあまり登攀歴歎をそそらな

「滝だ。直登は放遠する事としへが、ヤフの中を機
くつも面白くな」と、滝の右手に真直ぐのびて、るチム
ニーに取付く。水無の本谷の大滝にあるチムニーの
桟に腕くは全く两千兩足を 突張つての登攀は
誠に快適であるが、ルックが少々邪魔だ。滝の直登
よりも兴味あるルートである。チムニーの上部から
滝の落口へとトラバースしたが、すでに何人が入込
で居るらしく跡跡がある。

無名の滝を過ぎると右側に水量の少な、大ヶ沢
を迎え本流も水が無くなる頃 落差三千米から四千
メートルの同角沢最大の滝、遺言の滝が現われる。素晴
らしい、スラブだが達成全事に水が全然ない。
丁氏は下段の滝の右手に取付、バンドをトラバース
して釜に降り立つたが、小生は滝の直登を試かる。



チムニー

遺言の滝



中程まで行くとホールドが全然なく壁が開けて突張
クリも効かない。仕方なく上からサイルを垂してもらい
手を借りて一気に釜へとび出した。此ぞから滝の
左半を登ると落口だ。ここで登飯にする予定があつたが、少々寒いし火をおもいそくにも木が濡れて
いるので、すぐ下に掛けた。

遺言の滝はヤフの中から下ったが、丁氏はさっさと
滝を下って、下の方で「ほやくしてな」と早く降
りて来た。ヒトとなつている。

殆んどか滝は機き道を降つたが、最後の三重の
滝だけは機け下、ザイルを解いてアシガーディレンで
降りる事とし立木をビンにして下つた。ザイル(30m)
が新らしくの痛事。

やがて玄倉川が夏之始めた頃 ホックと
雨が降り止んだ。

(タイク)

テント発	8.40	同角沢出合	
無名沢出合	10.30	大沢出合	
遺言の滝	12.00	遺言の滝発	
12.20	11.00	8.50	
14.30	11.25	10.00	
14.30	11.25	10.00	

才三日

ザンザ洞

田中莞二

夜半からの突風に悩まされて殆んど寝られず
そのまゝ雨の朝を迎えた。結局今日の遊行は

中止と云う事にして八時頃まで濕つたテントの中で
寝こもるひいた。しかし雨も上がり少しずつ木棧小
屋に逃込み、ストーブで飯を炊き朝飯をとる。小
屋の奥やかに珍らしいものが有るよしと宏された。

野生物の肉は脂がなくて仲々美味しかった。
とがくするうちに十時頃明日が始業式だとさう
Kが雨の中を玄倉指して帰つて行つた。

雨の山の中は誠に退屈なものである。仕方なく
小屋の奥やかの兵隊時代の思い出話に耳を傾け
ながら時計をつぶして居るうちに一雨男のKが
帰つたらしく、Kの確信が見事裏付けられ
けされ十二時頃府も降り止んだ。
ごろごろしているのも面白くないと握り飯二三ヶ
をクリックにつめて、サンボ洞へと向う。

林道が終つたところで吊り橋を渡り対岸に出
る。此處は玄倉本流と松洞との分歧点である。
ユーシン山の家を過ぎて、祠の階段を上ると道は山
腹をまよて松洞に沿つて続んでくる。見下す松洞
の流れが素晴らしく試験に次ぐ試験の悪夢
さされ、ハヤカマツ去つて呉れるよう。

やがて石小屋沢へ指道標をすぎると道は河
原へと入り、荔とは河原を砾石で、歩くだけでも
ある。やがて右にユーシン沢を迎えると沢は滑状
となり、すさまじく左より下りて洞が小さな滝と
なつて落込んで来る。(指道標あり)

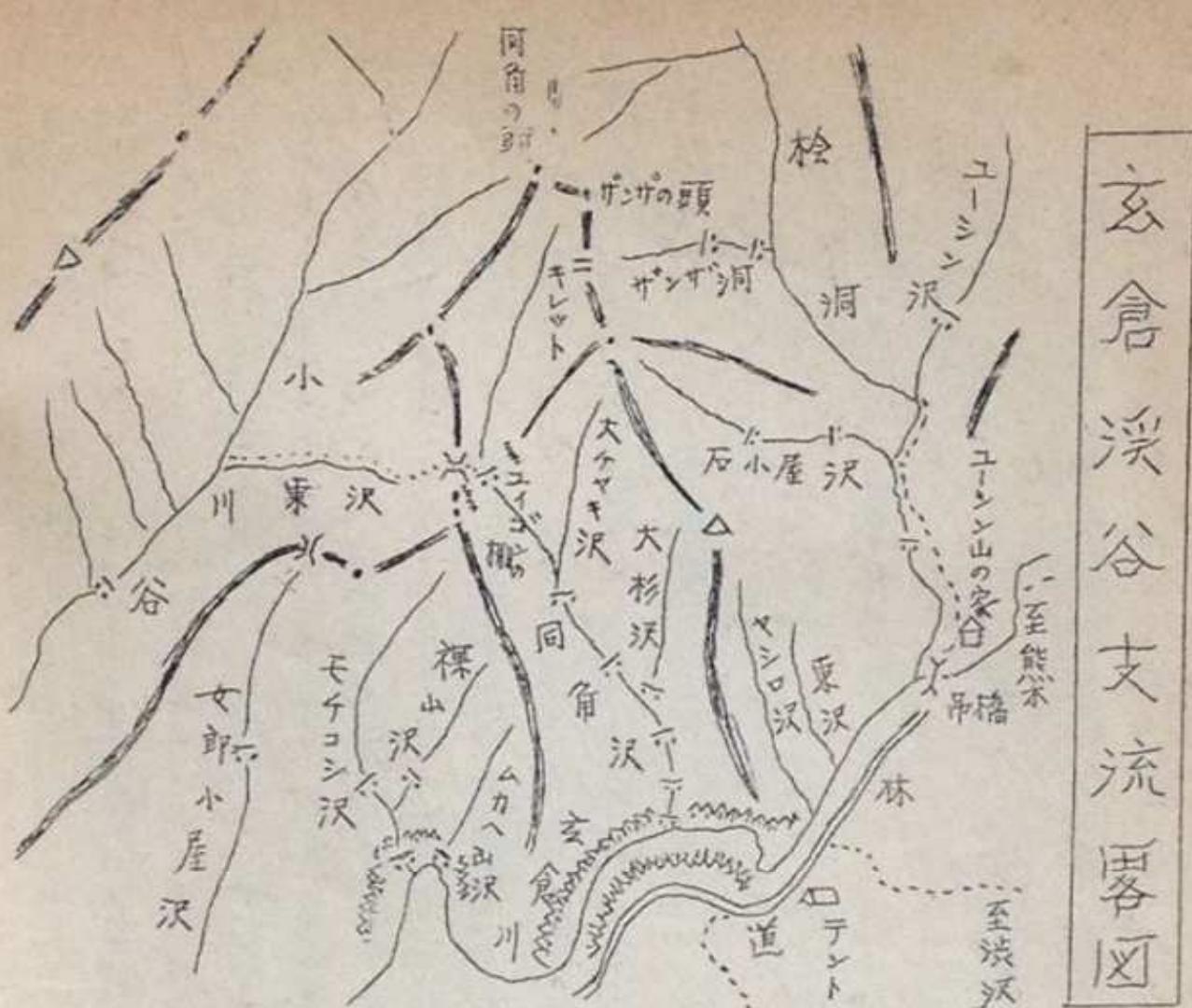
次に入ると両岸せまつてゴルジュ状となり右半を
へばり氣味に進むは待望の下ノガニ段ニテ米と
をつて落ちてゐる。昨日の同角沢でも然りだが一
年も山から遠かって、ると高度変に圧倒され
驚いた。どう感じで足が震える騒がだ。

この下ノの横に二の沢の下ノが十五米程で同じ釜に
落ち込んでいて、辻さんや吉田は「すげえなあ！」

と同時に歎嘆の言葉をもらしたものだ。

本沢の下ノは悪るそうで敬遠して二の沢を渡り
右手を登る。つるくとして余り歓迎しない登り

玄倉渓谷支流図



だ。渡上からすぐに左手のマブに踏跡を見付けてもぐり込む。マブの露で体がヒッショウになってしまふが、根の所を暫く行き、下に渡り落ちて、るのを度下ら本谷へと下る。河原に降りて、一はらく行くと滑渓が落ちて、る。案内書を見て、た吉田が、これはどうり下りらしいと言ふ。渡を二つも通りすぎたものらしい。(ヤマの中で尾根のところへ出たりすぐ木谷へ下りないと下2の下に出られぬ)

此の滑渓は滑り易い。環に吉田がつよいと滑りおでこを打つた。渡を終て、まとも小穴を登ると右年から三の沢が入り、本沢下は十五米程の下ノが控えて、る。この度は左手の壁に取付、クニツク状でホールドもあそ快適にバスする。

やがて沢は二分、右手の沢になると下りか十メ位で落すて、る。これは左壁にアタツク。ホールドが少しがそれ程要くない。

二、三の小窓をすくると下ニテ洞大窓(二十歩)、控えて、る。高さはあるが水がないので見事な、しかし、これは機く草にして右の栈道に入る。すぐに沢舟におぐるともはや全然水がなくガラガラしたがれを一列に並んでエッチャラフシララと登るのだが、ワラジの下に小石が入り込んで痛く

て辱々立止る。乃たうはかスの虜見立ゆづ
かにキレットのあたうがすぐ急なバットレスとな

つてゐるのが望まれる。時々先に行く二人の姿がガ

スの中に消えるが急ぎにも足元がくづれて仲々

進まない。ようやく二人が休んでいるところに辿

り着く。仲間のキレットで腕、岩尾根である。此

处から夏の富士が見事なものらしいがスリため

何も夏のまゝ。唯、尾根の両方に切入らでる

がしだけが物凄い急なには驚かれる。

時間がなく、めですぐに歩き出す。腕の道を少し下

ると、乘越（指道標）である。ここより一気に同

角沢へと下る。相当急ながして落石が多く同隔

を保つてズル／＼と滑る林下る。

二ヶ所程手すりつてようやく本流らしくところ

へ出る。なまも下ると見覚えのあるところへ出

た。昨日登った遺言の棚だ。ここでやれく

と一安心してどかつと腰を下してしまつた。時計

は四時を回つていた。霧雨が降つてゐる。

（ダイム）ユーリン（十二、三五）——サンザ洞谷（一一、〇）
——大滝（二、三〇）——サンザ洞乘越（三、二〇）
——遺言の棚上（四、〇五）——同角沢出合（五、五五）

才四日 七千コシ沢

十一 賀四郎

今日も朝から小雨である。小屋で休んで、そ

もう、飯を食う。テントを運んで、テント

述べてから入時五十分河原を离れる。

同角沢を右に見て、二、三のトンネルを下り、モ

チコシ沢への下降段を探しながら林道を下るのを

みるが全然判らずに仏岩のトンネルへ入り、心が

付いてしまう迄未だ一月つた。（もつとも林道からモ

チコシ沢本合は望むずが出来ない）

トンネルの入口のガレを下って玄倉川へと降る。

此處でテントその他の荷物を置き、一マイルと三、四道

其だけ取本して逆に今度は玄倉川を過る。

何回となく渡涉をくり返すが時にはYのマネ

をして棒高跳（ろくちょう）と木を握んで渡れば跳

んだが悲しいかな複数と丁は足が短いため見事に

水中に落ち込んで濡れがれとなり結局冷され

て渡渉した方が得だと覺る次第。やがて両

岸が切立て果然廊下狀となるところで左午

よりブルジューとなつてモチコシ沢が落込んでい
る。ヘモチコシ沢出合に立つには前記トンネル手
前より玄倉川に下降して河原を廻行するが、
砂防工事つゝをして、るところあたりから河
原に下りて逆に玄倉川をくだる以外に現在の
ところ年はな、林だ)

モチコシ沢出合附近の玄倉川の景觀は、玄倉
の核心地帯と言われるだけにすばらし、もので
林道からは、うかがへ知る事は出来ない
さてモチコシ沢に入ると出合は三米幅位、めづる
ジユでルートは左壁左壁をへづるのであるが少々忍
べ途中ドハーテンハーテン打込んでありそ効あ！
ゴルジユを抜ケると果然丹沢有数の名瀑、大滝
が二段六十米の落差をもつて凜然として落込んで
いる。誠に見事なものだ。

下段の滝の基部から取り付けて壁を登る。木ん
ドもあり困難ではなが馬鹿に岩が脆く三十メ
トも登ると広い釜をもつたテラスに来る。此のテ
ラスから見ると十米程のところに岩の突起して
いるジッヘルホイントがあり、その上に渡に沿つて
走るクラックが古くへと残つてゐる、れど上段の



直登ルートらしいが
今日は凄い勢い水が
流れ込んでいる。
小雨降るこの肌寒
い天候ではと直登は
断念して次、林舎に
譲ることとした。

(由みに既に犠牲者を出してゐるの大滝の直登は
西丹沢でも有数を悪場の一つである)
此處で釜をトラバースして右壁に移り、又その中の踏
跡を登れば高塔マルートへとぶつかる。

林道とは云ふ岩のまろゝ急登一である。
見下す大滝は下から見るとは異常に相当な高
度をもつてゐる。河原に下り、二、三の段を越すと

西丹沢第一の悪沢裸山沢が右手から入り込
んでくる。などを小滝が連續しやがて沢が二分さ
れ右の沢は五、六メートの滝となつて落ちてゐる。
こり滝が案内書によると下りで正面の沢に入
るとすぐ稜線へ出てしまつようだ。下りを左から

て、此處で始めてザイルを結び滝の右手に取付

べたがホールドの少ない悪い壁だ。十二、三米登って左
へ落口へとトラバースしたが落口附近へつるくと
した。スラブで殊に悪い。

続々登って来たYが落口でスリップし水を頭へ
う浴びながら上って来た。

やがて廊下状の中に最後の大棚が落ちて来る。
バスの時間に遅れるのを懸念して大棚の直登
も割愛し再びモチコシ沢を下る事とした。
物色したところでは右壁の十米程は樂に登れ
どりであるがその上部は全然ルートにはないまゝ。
結局案内書の通り通り滝の右から左にザイル
トラバースする以外に手はないようである。しかし
左壁のクラックも浅から相当の苦斗はまぬが
れまゝ。兎角登攀の可能性を認めて、そ
まゝ小雨降る沢を下った。

今回のみ宿の主目的たるモチコシ沢下の直
登が出来なかつたのは何とも残念だつた。今夏
には是非アタックしようと思つてゐる。

(ダイ)

二時間

最後の大棚下

一時間半

合

又省

今回西丹沢合宿は天候に豊まれず、十分
な成果を残す事が出来なかつたが、何とも致し
方なら。

スユーションでマラジの入干が効かず、肩にYなど
は全日程地下足袋で遊行する羽目となり
ハラ〈されられたが以後、この様な事のないよ
う心掛けるばなりな。

用具(ザイル三本、補助ザイル、捨急、三つ道具)
食糧等は一応万全であつたが、但月にアオム
ナイして露營地の検定は少々不十分のよう
だ。

兎角 西丹沢の概要をつかんだと、うむたぐで
も今回の合宿の意義があつた事と思う。

後記

——これからユーションに入る者の肩に——
西丹沢に入る机关は新松田である。小田急を候
う場合は新宿—新松田往復三〇円、国府津

圣由の国鉄から学割で浦和→松田 往復三百
 六〇円。新松田→神縫のバス時刻表は後記す
ろが出来れば新松田発二時二十分以前で行き、
殊にテント村参の重荷の時はそつ校バスだと、ユ
ーラン着が大分遅れてテント場の送迎に困る事
と思う。バスは落合又は焼津行。神縫(カミナリ)
までは55円である。大和屋雜貨店の前に停る。
ワラジは玄倉(クロクラ)でもユーランでも求め難
いから心下(ミ)の雜貨店で買う。(一足25円)
在此の店には煙草も買って、電池もある。
今迄のユーラン入は、玄倉から山神峠を越え
て入ったものらしいが、林道がユーランまで延びた
所、在では時間的も大して変わらず、玄倉川林道
を歩いた方が楽である。特に重荷の時と、夜半
にかけて歩く場合は林道を歩くに限る。
林道は玄倉を起点として一〇〇米置きに、指
標が立っている。八〇〇メートルを一寸行つたところがユ
ーランである。(神縫からは一。糸)
即にバスが試運転に入つたので、二、三年
後には神縫から歩く苦勞もなくなる事だろ

バス時刻表

新松田
 → 落合
 (神縫52分)

6.50
 8.40
 10.55
 12.15
 14.20
 15.05
 16.45
 18.15

神縫
 → 新松田
 (谷峨, 25分)

9.58
 12.23
 13.38
 15.58
 16.38
 18.38
これらバスは小田急との接続がよい。

現在玄倉川は開発工事が活癡で、ハヤガニ等の程度で行われて、注意する。登山者(スレのして)は、地元の人は皆親切である。自から、ころづけの態度も大切。
サイレは30メートルは是非欲しい。ユーランを基準とする場合、下降ルートは同角沢が良い。

西

丹あ

次

水



K.T

イイダが、下を歩くてもイイダ。
なるほど、良く見ると此の河には水がなかった。
子供の言葉から「俺ら三太だし」という放送劇の舞
台が、此の土地に近い事を思い出した。我々は、色の黒
い三太達に見送られながら、ゆらくゆれる吊橋
を向う岸を渡つたのだった。

△ 真面目な話(其の一)

方二日目の夜半、雨と寒風に見舞われて、雨もしくに
焼まされた一同は、テントの中で座談会を開き至
急天幕を防水に出す事をきめだが、予算書が赤字
の現状では会費によつてこれを行つ事の出来ない
事を憂慮し、此心に一同頭をしぼつた末、結局
我等が顧問Y氏に寄附金をあおいで、これに当てる
事を満場一致で可決した。

△ 真面目な話(其の二)

△ 神縁の子供
才一日目神縁でバスから降りた我々は、傍に
居る子供にユーリンへの道を訊いて見た。
したが額の子供は細い道を指差しながら「あ
そこが近道」と教えて呉れた。成程それは近
道には違ひなかつたが、一分と遅くなる、近道だつた。

△ 玄倉の子供
同じく玄倉の部落に入つて吊橋の前で子供
をつかまえて道を訊いた。ガマ蛙をぶら下げた
子供が「此の橋を渡つて真ツツ行くだ」と返答
する、その横の元気の良い子が「橋を渡つても

同じ座談会でY、K、Tが現会長に辞任を勧告
会長へ聞く、これを受入れた。依つて四月末の総会
に於ける役員改選には新会長が誕生する事となつたが、本座談会は大武氏を次期会長
に推す事となつた。從つて、ここにようやく我々は、

人、各高蓮にて博学多才な会長を迎える事に
を了。

△ 木樵のおやぢの話

「ヨーシンのおが（小屋番）は 最近金剛イが良くて 霧氣流涇桟を持てる。小屋は大分もうかるらし。おち、はガッチリ屋だ。だから 夏場になつて 登山者が河原にテントを張り、ヤマンガアイマーク傍で歌ひ歌つて、いる姿を見ようものなら、おがいの桟妹が一日中悪るいそうだ。何しろ 金蔓が自分の小屋に引掛けなん、んながらな」

Yはおがいには登山者は札東に見とるんだろうと言つたが、その伝で行くと 四日間も河原に屯して、我々の顔は、あがいには聖徳太子にでも見て、いたに違へない。もつとも 聖徳太子にしては馬鹿に威厳のす、顔振ればかり揃つて、いたが。

△ 河原の雉打

ヤアの中と違つて快適なものだ。手唄な石を探せば、腰掛けで打てると、言う洋式がある。そんな石のくんびりと構えて、たら、何時の間にかあたりが眞暗になつて、紙を何処に置いたのか判らなくなつたのは少々参つた。

△ 泣ぐ出る程からハカレー

二日目は我等が会長の誕生日だった。この夜 テーブルではさ、やかな誕生祝が開かれた。肉の夕食に入ったカレーライスに肉汁とう旨つて全く御食官に、会長は嬉しそうにカレーライスを食べながら感激して涙を流した。

△ 煙草

遂に山の中で煙草の切れで一同、ようやく言合いで二振りにあいついた。馬鹿夏（たまに）寝、続け、お陰で、帰りの列車の中では皆一枕に頭が痛くなつてぼやけたものだ。

△ 悪場

煙草と言えば、下は帰りの列車で長々キセルふかしたものだ。沢の悪場で滑つたり、転んだり浴びたりと大活躍を演じた。彼は悪場は捲くしかずと捲き道に精通して、列車の中でも検と、どう悪場を巧みに捲きて無事御帰館ばーた。

丁への忠告 || 山男たる者は正々堂々と

正規のルートを歩まねばならぬ。ルートを踏むる時は遭難あると知るべし。



歩 慢音 (2)

彦泰 田吉

そして奇しくも、これらの曲を今年の二月二期会の人々が歌うのを聴いて苗場山車を思い出したのである。

はて? 苗場で歌っていた人々も非常に紅つたので、あの歌はこの連中から、と思へしな。が

昨年五月に辻さんとモウハ次郎の帰りつた倉屋根や豪華な旗帶ラジオ、涼たる西日本牛の流行歌、聴入る人々はガムを噛みこむを見て、山と歌の是事なアンサンブルの苗場山の清々感動をこの時も思い出したのだ。

一昨年の秋、菅野君など三期の連中と苗場山を訪れた。神楽峰からの苦しい登りを頑張って頂上へ飛び出した。その時、

され、今コーテスが流れて来た。小さな水の環を囲んだ数人のハイカーの歓喜の調べだ。『野ばら』や『鍛冶屋の令嬢』が入っていた。事を憶えてゐる。

レコード・コンサート毎金曜午後七時(於)山縣邸(但し茶菓子は出ませんから各自用意の事)



The image shows the front cover of a Japanese book. The title '仲間を語る (1)' is written in a circle at the top left. The author's name '吉田泰彦' is written vertically along the left edge. The word '感' is written vertically along the right edge. At the bottom center, it says 'その(1)'. A small circular logo with the text 'ツク・カツシロウ' is located in the bottom right corner.

卷之三

可憐な坊子達だったが、その中で一まわでかく、色
が黒く、そしてごつ、額立ちの男が目に付いた。
「これは少々頂けない野郎が居るな」と思ふながら
俺はこう言ってみたものだ。

仲間を詔る。一
オ一圓は先づ我等
が變ずベシノシホマン
吉田泰彦の登場で

彼を裸にして(そうして)
ば彼は清水昆猫く

カツバに實に良^イ「似て
「るね」さて大^ニに
「ぶしよ^ウ。

(前白)

彼は世間にもまれ余世話を好きなどアリだ。今はY氏の嫁探しに奔走してゐる。そういう中俺はも何處にも片付き様もなく、實戦ノき世話をしてくれりやうとした。俺はそれを樂しみに待つてゐる。しかし人のものいゝが、そろく自分でも探しで置いた方が良くはないかね。あと四、五年至つと会報に彼の求妻する玄巣が出来る事だろう。

俺は吉田と初めて会ったのは確か高校二年の年の暮の秋に記憶する。山岳部の結成された年で、未だ男子部と女子部に分れていた頃だ。その女子部から松林苑やる上木崎のオノボロ校舎へ縣さん(引率されて)彼を交えた一年の部員がのんびりと初対面に来たのだった。今と遡ってその頃の彼等は純情そのまゝだった。

彼は仲々に気が付く男である。山旅の帰りともなれば、酒屋を探すし、人が一寸妙な素振りをすれば、一社打ち場はあらりしと紙を出して告げて呉れる。
しかし時には先走る事もある。何時かも俺に何人で、から山の記事を沢山書いとけと言ふ。何がと思ったら俺が蓮薙した時の遺稿集の用意をぐぐそしだ。早くも俺を殺す気とは、嫌な奴である。

彼は仲々に趣味の豊かな男である。トトロケ音楽の詩となると傍に居る者は謹聽を余儀なくされる。

一の倉の若登りにはショスタコビッチの「森林の歌」やベートーベンの「皇帝」を思ひ出すぐだそうだ。しかしショパンの「葬送」は下午すると蓮薙するから思へ出してはいけない。《金報第一号 音楽慢歩》
今度一の倉の一端に入る時は、俺は「葬送」なる曲を口ずさうと思ふ。うまくいつたら奴は若から落ちるかも知れぬ。どう(ぐら)こちらが遺稿集をかしてやる番だ。

彼はスキーはあまりうまくな。谷川で俺の穴をよけとねて美事に横転した時、すかさず俺と三人で勘七に入った時の事。彼は何と木ラバへ旧

制へ高校生が受用してたあれである)でお木けになつたものである。さすがに沢に入つてからはシニ穿き替えたが、しかし帰りには西表尾根をのこりとそれで歩き通つてしまつた。同じ丹沢の表尾根ではゴム長で木ロクサク姿目直し、そのゴム長姿は残雪期の谷川で再現して笑れたものだ。旧道を歩いてる姿は木だ衰かつたが、そのゴム長にアイゼンを付けた光景は、何とも奇妙なものだった。

同じ谷川での雪中露營の時のこと。夜に入つて

皆目判らなかつたのだそうだ。

小用を催して来た彼は外に出来るのが面倒とは
ケ天幕の中で横になつたまゝやらかした。おが下
でテントが少々かしこだまつた。
流石の僕達もこれには閉口して、「大まゝのだ
けはやめてくれ」と両手を手つて懇願したも
のだ。

四、五年前より、谷川の帰りには彼は旧道を歩き
ながら、「僕はもう二度と此の山には登らな、そし」と
武能のあたりを見つめるながら僕に向く誓うのだった。

僕と奴のコンビでは、いつも岩場からの転落や、雪渓
上のスクレーブがくり返されたからでもあつたろう。
しかしそんな誓いことも忘れて、彼は又のミルクと
此の山へと足を入れるのである。走りぼれて、山がら見放
されるまで、彼の誓いことは実行されまで。

彼は登山は滅法強々、だから登山でハツハツ
かけるのは彼だ。しかし脛の長の彼は一々苦
手だ。だから下りとなればハツハツをかけられる
のは彼の番だ。

彼はめまい人の気をそらさない男である。
南アの或小屋で日本語かどうか判らぬ小屋番
の言葉にアシカと相槌をうつ次女を見て、奴
もアシカ旅慣れたものよと感心したものだ。
しかし後で聞いたら彼にも何を言つていいのか

彼は弱々くと言ひながら酒には飲まれない
男である。しかしビールには余り強くない。

南アルプス山旅の帰りに、野中の掛茶屋で冷たいビ
ルを飲んだ事がある。西に傾いた夕日を背に
父になつて、旦々とした田舎道を彼と僕の
手の影が、交錯して又離れて動いて、光景

を以て良い思ふ云うて僕は今でも時々思ひ出す。

「アタリでさめられちやーかなわねえや」と
一矢比の男はリウマチ持ちだった。高校時代
アーチークがその端緒だと言う。そして

今ふ二月、合川岳と金峯に於ける雪中露
宿は、ついに達成してしまつた。以下彼から未だ手紙
へ届いてゐる。

往々中登山には全たく矢礼致しました。
皆さまを御立腹の事であったと思ひます。
当日々全く腰が立たず、よく人へたる

の感歎します。今懸念用起を因つて
おきます。

敬具

今や再起を圖りつゝある彼は、トホンをや
ベアと張っては、登向の錢湯へと通つて
る。かくして湯船の中では、お刺繡となつた同
病者や老人と共に、彼は人生を論じ、哲学
を論じては、同時に風呂賃の値上反対を論
するのである。アーメン

論彥泰田吉昌山縣



仲間を語る
(1)の2

引続き衰弱した身を谷川岳合宿中の部のペースキヤンアド連んでテント番をして、た時、病人用にとわざ／＼オジヤの如きものを作って食させてくれたのも彼である。見たところ、とても食欲の起きたようなしろものではなかつたが、そくと所も器用に作ってくれた彼の手並み食べて見たら案外美味かつた事は今だに忘れない。

前記の大菩薩でのオクンが遠因をなして、るのかも知れなが、彼は年に似合わずリラマチに悩まされて、る。焚火で尻をあぶつて寝るのが日下唯一の対策らしが、腰が痛、竿と言しながらも冬の谷川岳へテント（夏用）を持込んであの雪の中、寝たりする。

まだ／＼彼は健在であると安べしている次第である。

一面彼はハイゲアルティの四季を讀え、ベート・ベンの弦楽四重奏を論する男でもある

即ち草に山古征服することに慕れる野人では

彼の人柄は、象を思かせるような目玉をもつたまるつこ、顔と、かッチリしたその体躯に貴徳なく現わされて、る。

よなく山を愛すると同時に人間を愛す

ると「マニスト」である。

前秋一年の冬、すでに顧問に無断で上級生教人と共に大菩薩に入り深雪のへき踏み送つて雪中で一夜を明がし、両足凍傷にかかる暫く一医者に通つて、たのも彼である。或は又、私が奥秩父縱走中に腹をこわし

く、音楽を愛し、又映画を見て涙を浮かべ、

ヒューマンなものに慕れる人間でもあるのだ。

然しここに現在の彼の予盾があるようである。

時たま彼はもうす。「俺は山のところになつて、

了したくなる。平凡な人間としての仕事が下界

にあらうだ。とすると俺にとって山は結局何だ

ス?」
「と。いくばくかの金を手にした時、彼

は山へも行きたいし、名曲も聞きたいと迷う。それ

は誰しも同じかも知れぬ。然しこの両者が

時間的、経済的な意味に於てではなく、その

人生觀に於て予盾対立したものではなく、

共通の美、人間的完成への努力とて意

識されるようになる事が彼にとって必要で

であり、又彼に対して望むところのもので

ある。



浦和市山岳連盟役員 現在まで決定してある役員左の如し

会長 未定

副会長 堀内氏(浦和岩峯会)

副理事長 山縣昌彦(浦和岩峯会)

監事 三上英藏(浦和岩峯会)

会計 吉田泰一(浦和岩峯会)

加盟団体 本後藤貞一(浦和岩峯会)

小篠玄高(浦和岩峯会)

葉沢新一(浦和岩峯会)

大東貞彦(浦和岩峯会)

吉田泰一(浦和岩峯会)

高峰一郎(浦和岩峯会)

高峰二郎(浦和岩峯会)

高峰三郎(浦和岩峯会)

高峰四郎(浦和岩峯会)

高峰五郎(浦和岩峯会)

高峰六郎(浦和岩峯会)

高峰七郎(浦和岩峯会)

高峰八郎(浦和岩峯会)

高峰九郎(浦和岩峯会)

高峰十郎(浦和岩峯会)

高峰十一郎(浦和岩峯会)

高峰十二郎(浦和岩峯会)

高峰十三郎(浦和岩峯会)

高峰十四郎(浦和岩峯会)

高峰十五郎(浦和岩峯会)

高峰十六郎(浦和岩峯会)

高峰十七郎(浦和岩峯会)

高峰十八郎(浦和岩峯会)

高峰十九郎(浦和岩峯会)

高峰二十郎(浦和岩峯会)

高峰二十一郎(浦和岩峯会)

高峰二十二郎(浦和岩峯会)

高峰二十三郎(浦和岩峯会)

高峰二十四郎(浦和岩峯会)

高峰二十五郎(浦和岩峯会)

高峰二十六郎(浦和岩峯会)

高峰二十七郎(浦和岩峯会)

高峰二十八郎(浦和岩峯会)

高峰二十九郎(浦和岩峯会)

高峰三十郎(浦和岩峯会)

高峰三十一郎(浦和岩峯会)

高峰三十二郎(浦和岩峯会)

高峰三十三郎(浦和岩峯会)

高峰三十四郎(浦和岩峯会)

高峰三十五郎(浦和岩峯会)

高峰三十六郎(浦和岩峯会)

高峰三十七郎(浦和岩峯会)

高峰三十八郎(浦和岩峯会)

高峰三十九郎(浦和岩峯会)

高峰四十郎(浦和岩峯会)

高峰五十郎(浦和岩峯会)

高峰六十郎(浦和岩峯会)

高峰七十郎(浦和岩峯会)

高峰八十郎(浦和岩峯会)

高峰九十郎(浦和岩峯会)

高峰一百郎(浦和岩峯会)

高峰二百郎(浦和岩峯会)

高峰三百郎(浦和岩峯会)

高峰四百郎(浦和岩峯会)

高峰五百郎(浦和岩峯会)

高峰六百郎(浦和岩峯会)

高峰七百郎(浦和岩峯会)

高峰八百郎(浦和岩峯会)

高峰九百郎(浦和岩峯会)

高峰一千郎(浦和岩峯会)

高峰二千郎(浦和岩峯会)

高峰三千郎(浦和岩峯会)

高峰四千郎(浦和岩峯会)

高峰五千郎(浦和岩峯会)

高峰六千郎(浦和岩峯会)

高峰七千郎(浦和岩峯会)

高峰八千郎(浦和岩峯会)

高峰九千郎(浦和岩峯会)

高峰一万郎(浦和岩峯会)

高峰二万郎(浦和岩峯会)

高峰三万郎(浦和岩峯会)

高峰四万郎(浦和岩峯会)

高峰五万郎(浦和岩峯会)

高峰六万郎(浦和岩峯会)

高峰七万郎(浦和岩峯会)

高峰八万郎(浦和岩峯会)

高峰九万郎(浦和岩峯会)

高峰十万郎(浦和岩峯会)

高峰二十万郎(浦和岩峯会)

高峰三十万郎(浦和岩峯会)

高峰四十万郎(浦和岩峯会)

高峰五十万郎(浦和岩峯会)

高峰六十万郎(浦和岩峯会)

高峰七十万郎(浦和岩峯会)

高峰八十万郎(浦和岩峯会)

高峰九十万郎(浦和岩峯会)

高峰一百万郎(浦和岩峯会)

高峰二百万郎(浦和岩峯会)

高峰三百万郎(浦和岩峯会)

高峰四百万郎(浦和岩峯会)

高峰五百万郎(浦和岩峯会)

高峰六百万郎(浦和岩峯会)

高峰七百万郎(浦和岩峯会)

高峰八百万郎(浦和岩峯会)

高峰九百万郎(浦和岩峯会)

高峰一千万郎(浦和岩峯会)

高峰二千万郎(浦和岩峯会)

高峰三千万郎(浦和岩峯会)

高峰四千万郎(浦和岩峯会)

高峰五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六千万郎(浦和岩峯会)

高峰七千万郎(浦和岩峯会)

高峰八千万郎(浦和岩峯会)

高峰九千万郎(浦和岩峯会)

高峰一亿郎(浦和岩峯会)

高峰二亿郎(浦和岩峯会)

高峰三亿郎(浦和岩峯会)

高峰四亿郎(浦和岩峯会)

高峰五亿郎(浦和岩峯会)

高峰六亿郎(浦和岩峯会)

高峰七亿郎(浦和岩峯会)

高峰八亿郎(浦和岩峯会)

高峰九亿郎(浦和岩峯会)

高峰一兆郎(浦和岩峯会)

高峰二兆郎(浦和岩峯会)

高峰三兆郎(浦和岩峯会)

高峰四兆郎(浦和岩峯会)

高峰五兆郎(浦和岩峯会)

高峰六兆郎(浦和岩峯会)

高峰七兆郎(浦和岩峯会)

高峰八兆郎(浦和岩峯会)

高峰九兆郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰三兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰四兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰五兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰六兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰七兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰八兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰九兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰一兆五亿五千万郎(浦和岩峯会)

高峰二兆五亿五千万郎(浦和岩峯

山場スキーリア



• 4月12日(夜行)
～ 4月14日

• メンバー
山縣・村田・筒井

筒井満栄

トンネルを過ぎ汽車は土煙に入っていた。気持よさそうにねて、村田さんを起し降りる仕度をする。三時三七分湯沢のしーんとしたホームに降り立つた。私達の他に二人のパーティだけである。少し食糧をつめこんで四時湯沢を出発する。外は未だ雨が降つてゐる。本末なら月光で歩けるのにびっくり。駅から道直ぐバス道を行く。

右に三国街道に出で道なりにもう一度右折する。踏切を越えるとあとは三国街道の一本道が続々とある。鐵路伝へて床で踏切を渡れば近道。しばらくすると真正面に、^{左方}木戸^{右方}が見え出しやがて火の見のある新道とせ原部落との分岐点に着く。

二、三日ハ、お天気だつたが、とうく降り出し小雨の中、スキーをかついで行くのはあまり良はない。四月十二日十時三六分大宮より前湯行の列車に乗り込む。汽車は修学旅行、生徒ものせて、るので席はなく、私達はそれより路に席を占めた。明日の事を考えようと良く心配をすればと目をつぶる。いつの間にか清水

部落を過ぎ、ミニから峠への登り道となる。雨は未だやまなが、懷中電灯のあかりもやつとらなくななる明るさになつて来た。峠に着く頃少しづつ日が差し始めどうやらお天気も良くなつた。さうである。峠からスキーをつけ入木沢落部まで滑り込むわけである。入木沢部落をすぎると清水川にかけられた橋に出る。そこから又スキーを

ぬが、少し行くと右手に森が見え、その中に神祠がある。醍醐線の左手から、いよいよ鉢巻峠、三〇〇米の登り（通称アゴタシ峠）である。重りユツヒスキーを肩にどうやらこの峠を登りきると鉢巻峠小屋に着く。お天気はすっかり恢復したようである。そこから夏道の細い道を通り、ブナの巨木が私達をむかえてくれる。此處で食事をし、シールをつくる。

少し降るとやがて外の小屋と発電所のコンクリートの建物を右に見送る。送電線を潛り抜け、ここで積雪量を示す杓指は、三米二十五センチを示していた。やがてブナ林に入る。明るい陽は谷川連山を照し、小鳥の声ものどかに、立止まるときどき音がする。そろく、疲れて来た頃、やっと苗場ヒュッテに着いた。十二時十分。五人位の先客と炉端を囲み昼食をとる。

一時ヒュッテを出発、シールをつけ裏側のだらだら登りでスナ林を通り尾根の左側面を登

る。醍醐線の左手から、いよいよ鉢巻峠、三〇〇米の登り（通称アゴタシ峠）である。重りユツヒスキーを肩にどうやらこの峠を登りきると鉢巻峠小屋に着く。お天気はすっかり恢復したようである。そこから夏道の細い道を通り、ブナの巨木が私達をむかえてくれる。此處で食事をし、シールをつくる。

すると、針葉樹林帯となり、そこを坂道と下の芝である。こゝからの眺めは一大パノラマが運び迎えてくれる。すっかり晴れ上った空に浮ぶ山々、さわ下に止めた車には尼うれをい。再び針葉樹の中を潜ると、中のせきそして上のせきと緩く。時間は三時。雪はクラストにて歩くとババ／＼と音がする。

最後の広いスマークを登りつめると神楽峰で西に苗場山本峠（二四五、三米）がそびえている。周囲は雪をかぶった仙の倉、万太郎、芝倉を始め、谷川連峠ヒヒ越、国境の山々が雄大を呈で鎮座している。三時四十五分、いよいよ下りである。宮林スキー場としている私にとって自今で斜面や、雪崩を見つけてするのにはなかなか大変である。

ケレンデと違つて恰好一筆すゞ言つてはいられまい。それに長じ登りで足の筋力も弱つてゐる。上元生の後を追つて一度左へでて神楽峰の方、スロ

一ノ谷ホーホンで降る。クラストした雪は制動
スノーケードバリ／＼と、やな音がする。その
前の前をいつも鮮やかな直滑降で村田さんが
走る。後で聞くところによると時速四五

50K位でその気持の良さは今岡クスキーリ
の子や最大のものであつたら、が、その時の
様子はいづれ御本人にお聞きになると武勇伝
と六八語つて下さるはずである。
壁ノ道の対斜面を斜滑降しながら滑つた
久軒人だりして、るうちにハツカヒュッテの尾根
が見え五時小屋に着いた。

小屋の人たちは皆ハハ人達ばかり真赤なち
やんをもんこに真赤な帽子のあがくさんび、この
ヒュッテの主、和田喜太郎翁で八十を越えた
であらうか、炉端でお客さんと話しながらして、す
くないタ元夜である。昨日まで飲料水も充分
でなかつた。だが、今日は清水でお風呂もたけ
て、た一小屋には五、六組のスキーライターが、女
子が全然居まゝは淋しい。これもよきペーティーと
周囲の理解に裏まれなければなか／＼ツア－

など連れて来てはいただけをいもと、御一社
させて頂けた事に感謝しながら、ランプの灯の
ともるヒュッテの眼下に着いた。

苗場山略図



四月十四日、五時起床

八日も又良、お天気。真夜中に着いた組もあり小屋の中も何となく活気がある。靴に油をぬき、シールをはいて出発の用意をする。

朝食の關係で出発は七時。できれば苗場山の本峯まで行きたるものである。今日は雪もしまつているのでスキーを肩に歩く。下り芝まで登げを考えると一寸ぐらいするが、あの眺めと帰りの樂しさを考えきり歩く。昨日よりカッサ川よりの谷を歩いて上の芝へと直登る。上は相当強、且て立ち止ると、以り追われてしまふ。そうである。神楽峰を着八時半。昨日二時間半もかゝったところで一時間も早く着いた事は嬉しかった。

木峰へは西側の鞍部に大きく突出した。雪庇をもつ三角地まで行き、そこから急斜面を下り、木門へ立て込み、スキーでオーバーして、からアイゼンをつけた。四本杖とストックがあれば十分である。木門の右側から樺木まづの急斜面を登りやせ尾根へ出て、後は稜線を伝へば風で雪皮が舞ふ。吹き止むれ大の雪皮が斜面に飛んで行くのは何が、煤々の大群を思わせた。私達は三前段りくぼかの日本でシールを外し、九時五十分位貸す。いくつかの小さな、ぶを赵え、神楽峰に底り、ヨウズヒニ広ハスマードを降り、大手の樹林へ滑り込む等、各々樂みながら滑る。摩は昨日と寒い湿りを帯びスキーは落ちて、私のようすスティマーには丁度良いくが、こでは村田名カメラマンの腕の振るところ、大いに竿と奥をとりながら樹林地帯を抜け、やつくり小屋に着いた。十一時である。

すぐ昼食をとり降る用意をする。降りはリップを背にするので少々苦手である。ヒュッテのおはあさんへ送られて、よく出発だ。村田、筒井、先生の順で滑り出す。お

。。。。だいたい一時間半もあれば頂上に立てるであらう。私達は時間の關係で残念ながらルートを確めてしまふ、下る事とした。

ああ、人のつけてくれる苗場ヒエッテの鐘がカシカ
ンシ山の空氣をふるわせ、私達を送ってくれる。
此のコースの標識である杉の木がとうぐ姿
を見せる。なんらかな下りでありますが、雪がベタ雪な
うてスロープが出来てしまふ。もう少しテストして、れば
へぐれトが出来ば又文句を言う癖にとおかしく
な、ノ等 残念がる。

一中で銀バラ等を塗り直したりしながら行
く。外の小屋もハーフカバーして問題の鉢巻
木に掛け。この間 記録係 無我の境地で
う、ヤシクター、や体ごと滑ったいてるうち
下まで来た。

△ 全コースとしては、小屋までの登りを覚悟すれば、女子の方達も充分楽しむことができます。

小屋代

夏
之
令

交通黨

二
九

卷之五

10.
3.
4.
5.

卷之三

00
30
50

卷之三

苗場ヒュッテ 7.
禍篠峰 8.
△ 三角窓室 9

苗場ヒュッテ

三

三

鉢巻

卷之三

卷之三

三

芝原時光

1

水經

三

卷之三

元

記後集編

六月下旬に発行する予定であります
た会報二号、都令により丹沢特集と
しまして此處にお送り致します。

山行報告が大半を占めてしまいましたが
今度は多數の会員諸君の投稿が
あり会報充実への協力の兆しが見えた事は幸です。

未だ／＼甚しく不備、不満のある会

報ですが、お／＼充実したものにさせたい
と思ひます。今後とも協力下さい。

X X X

溪稜、オニ号

昭和三十二年四月二十日発行
発行所 溪稜山岳会

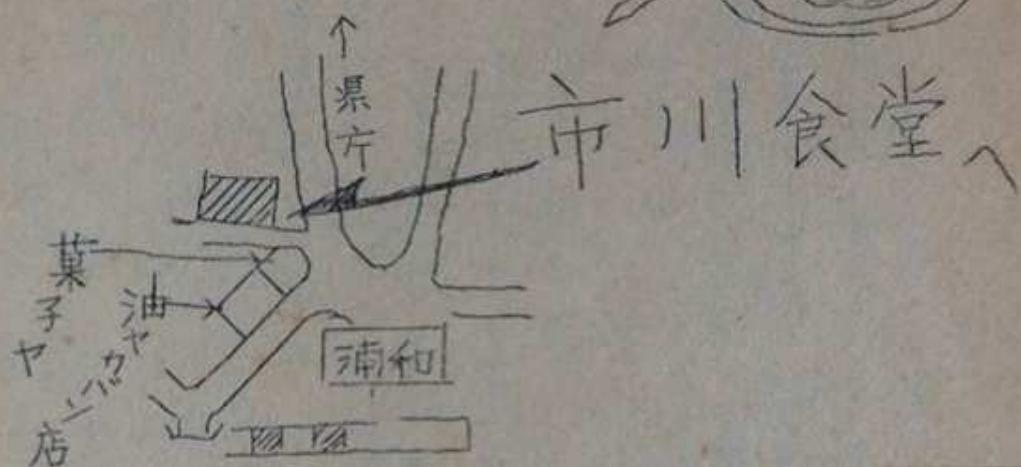
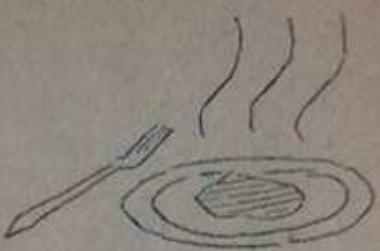
責任者

辻 勝四郎

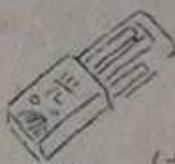
浦和市高砂町五の八九

次号から編集、筆耕は持回りとなります。
差当り吉田君の番となりますが、編集その他
お気付きの点を申し越し下さ。

トンカツは



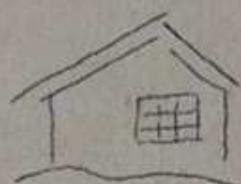
酒



山本屋

上木崎 4905

TEL(5305)



建増ヤ

改築には

村田
材木店
TEL(4413)

会賛

は早や松、まよ。

